



源氏物語一代記
五

特別
リ5
15641
5止



145
15841

そをいへりうの云世の
なるさかす木の根
ま時をうらうらうら
とくちをくしてひら
トさるのさるうの
下めをまよひなる城
中めをまよひなる城
款すすべさとの思ひ
すす法さの款を
かきよあひちり
さるばん中にくうて
用ひのてのもあくひ
との云一人もあひ
たり吉原先まよひ
さまふらまよひを
うけさうくとさる
うてへいの中よと
たり木戸をひらけ
なれのと百八十人
中めをまよひなる城
中めをまよひなる城
とて座ををとりて
えろふ時お目のつ
くれよてやあうら
きひよといひてせん
ともあうす株ひり
わたり
なる



形て云而八十人
 入りあつて夜
 中のつまやく
 上のらるあく
 ことゝて夜もわ
 のことめをせん
 とさるはよあう
 なるかかひはさ
 のまうこさうま
 らんとてそのや
 くらうそのや
 不ふたをうけ
 せよ人多く城
 中をうけても
 味酒をうけら
 けりあひのま
 城のあんあひ
 今うくんはま
 ことの際なま
 をうけてはう
 むとまのまを
 さと上ては
 切てあうなる
 よ勢のあんま
 もりたまはま
 大せいお入
 とくあれね



とびきり
 たいやうふれ
 ちとむいせ
 りうともわ
 我先あたら
 りうひの
 夜うら
 大勢う
 ト一勝
 付ふ
 くりあ
 て門を
 ぞくち
 百余人
 刀のや
 くらあ
 ひりれ
 背ふさ
 黒々
 をあさ
 かせい
 床の尾
 さらり

将門



去程小舟門の巻
 ひろしをあらわして
 らるる小舟とて
 とすべしとて
 十日後の巳のち
 まりしをあらわして
 らるる小舟とて
 とすべしとて
 甲をぬいて
 ぞおのろく先
 みあはくさの
 を焼として下
 ちべいんを
 云のとう我
 とくさん大
 よく大勢あり
 合七方又余
 ておろこと
 万騎もさ
 万れたぬ年
 の老花あれ
 付死とさ
 たりなり年



大舟のりて
 天地のひら
 一子武蔵
 万騎もさ
 万れたぬ年
 の老花あれ
 付死とさ
 たりなり年





長小むすの侍ハ文彦の
 好意ハありてしうはひ
 たり軍中やきて去れ
 たり所ハ小礼ハある
 の勢ハあり小礼ハあり
 けりおかしき事
 凡そグク吹きて
 方二十丁方小三
 十余ケ不問付
 り人上りこれハ
 更なる大地
 とうとめさる
 火東西まさる
 あるも下り
 二万余程の云
 入ててよ切
 せせりとふん
 休せせとふん
 どりさるあり
 さも金銀を
 ちりちりめ
 一すものさす
 中け失りけり
 小中よつる女
 ち性左性ふけま
 上ひ火の中つる
 上ももの守る
 まらふありさる
 めてさね決まあり



扱もぬ流經西ハ
 けりありてり攻
 ハ敵とて入て
 けり二十余ケ友
 のちけ合ふも
 ありてけせ我身
 もうさるあり
 ひねりて敵と
 らんてさちか
 ありのりとさ
 さるる百八十
 間ふとささる
 とけり田原千
 降くけハ北角ハ
 面も切てさる
 ぬけて味りこ
 せりや十七勝
 ありたり今ハ
 生とけ降ふあり
 けりハ後方
 けり中あれて
 署付免仕ハ敵
 を付ねさるあり
 かいハ徑内先
 けりんと後一
 ありて切て其
 持門が茶も
 ろうに伏たり



初めお門の勢三郎
 余勢を盡して入ると
 さることながら
 大勢三万余
 騎とてひそ
 なるよとあり
 たりうけひて
 ずたうてさよ
 せんまうしぬえ
 くよみひひいて
 息をもつせず
 うみへんええお門の
 ひとつれえ六騎よろ
 い甲ちかろすまひを
 一すうお出せせ岡もの
 るふのうまむ時も一
 ぶよもてありぞく
 由たよ引ええお門
 あまの何れとお門と
 又うけぞうりれお門
 もとのぞく七騎のお門
 うろをこをあふとあ
 ずうひひとて我ひ六騎
 悪くけれそのかの
 去皆付られたる程よ
 今いお門一人よぞ
 ありみたり



お門尚も
 敵の陣中
 をうけとる
 向ふ老とさ
 いつひおあだ
 ちてふ時の
 ちふ七十務切
 てととろろ初
 みた力もかもつ
 をりとよりあつ
 きたとれよりね
 び大ひとひろげ
 大いんよあつて
 せを合てハ引よせ
 ねら首おしておさる
 をあつてのいあげま
 さつてんで人つておあひ
 さんりれいおあつる老
 二五人八人十人より
 をちて死にええお門の
 俊人岩沼八郎とて六十人か
 あらるがお門はさふんとせよ
 いらお門大は笑ひやう老の
 ありまひをかはさのいとるをさ
 せんとてて引よせ左方の小りのあ
 丁とあざりいといとてとてけ
 い者てけ肉ちぎれてあのうでんか
 ねのさりそのさう十六斗りあげよりちり

将門

岩沼八郎

お門がけりう雨かよ
 おそれぬしてを
 く老もあつちんと
 きて十方より
 ぬのこくみいより
 たりされれその
 てろふしてやあ
 せんもさうして
 一矢もまきうられ
 ば法をうあんで
 入ふまろりう
 西の方より黒雲
 一村さかひて白
 羽のうさう矢山川
 もくろく斗まひ
 ひいてお門か
 中へあつち
 のうらるるい東園
 のいんちくあり
 けりうてれおとれ
 けちちちちちち
 うすまむくま
 あつてまわうら
 まみ天ねを巻い
 けひ父の仇あれい
 ひ一矢ぬらんと
 けさうらまの
 射ひの申お
 すがのうてわ



のひりげとせ
 のをむあれと
 をとちとちと
 て三人をりみ
 十三米三伏
 多斗引く
 夫をどうけて
 切てをあす
 三とうの大
 若がうぐ
 の法か
 名款父の
 さは一矢
 思われとの
 カうや
 おと
 門が
 人の
 のうと
 夫尻白くぞ射
 かし
 のりう
 つの矢一
 くら
 さぬ
 友方
 どうと
 か
 を



畫工

紅翠齋門人
北尾蕙齋政美



彫工

朝倉權八
岡本松魚



三楠實記

續後三楠實記
五冊

續後三楠實記

五冊

續三楠實記

五冊

朝鮮征伐記

五冊

寬政五年癸丑正月吉日

秩父屋庄左衛門

江戸淺州第丁丁目
江戸本枝木町丁目

西宮 新六

地本問屋

同通油町

鶴屋喜右衛門

正



